

作家
河田誠一

半世紀超え なお異彩

早世した天才詩人

文壇の惜しむ声
廃刊「桜」に脈々

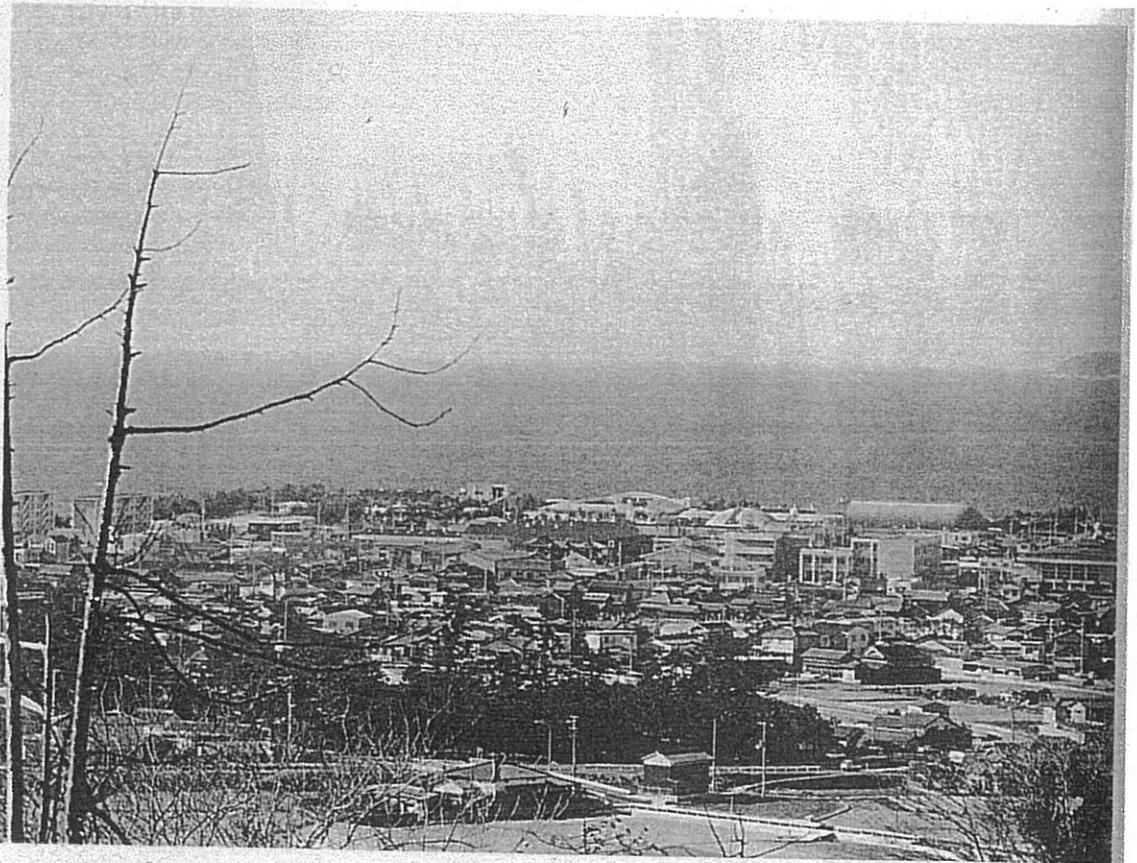
昭和九年二月十日、小説「肉体の門」で知られる田村泰次郎は、予讃線観音寺駅で下車、仁尾行き
バスに乗った。午前七時三十分発のバスに乗り遅れ、十一時三十分発の次の便まで待たされた仁尾行き
であった。

「漸くバスは仁尾の町に入る。山懐ろの傾斜面にかたまつた軒の低い瓦屋根の並んだ、シンとした静
かな町。僕が君のことをいふと、運転手はわざわざ君の家の前の道まで車体を乗り入れてくれた」

「君の家は一寸した雑貨店であった。僕が店へ這入って行くと、東京で一度逢つたことのある君によ
く似た君の弟さんの徳一さんと、清子さんが出て来て、僕を店に隣あつた部屋へ上げた。線香の臭ひ
が僕の鼻を襲つた」

（田村泰次郎・同人誌「桜」・昭和九年四月、河田誠一追悼詩集）

仁尾町出身の作家・河田誠一、といつても、作家や詩人の名前を収録している「文芸年鑑」（日本文
芸家協会編・新潮社）にその名は見当たらないし、地元香川県内の文学関係者にも、河田のことはほと



昭和9年、田村泰次郎は親友・河田誠一のふるさと仁尾町を訪ねた。「軒の低い瓦屋根の並んだ、シンとした静かな町」であった。|| 加嶺峠から仁尾町を望む

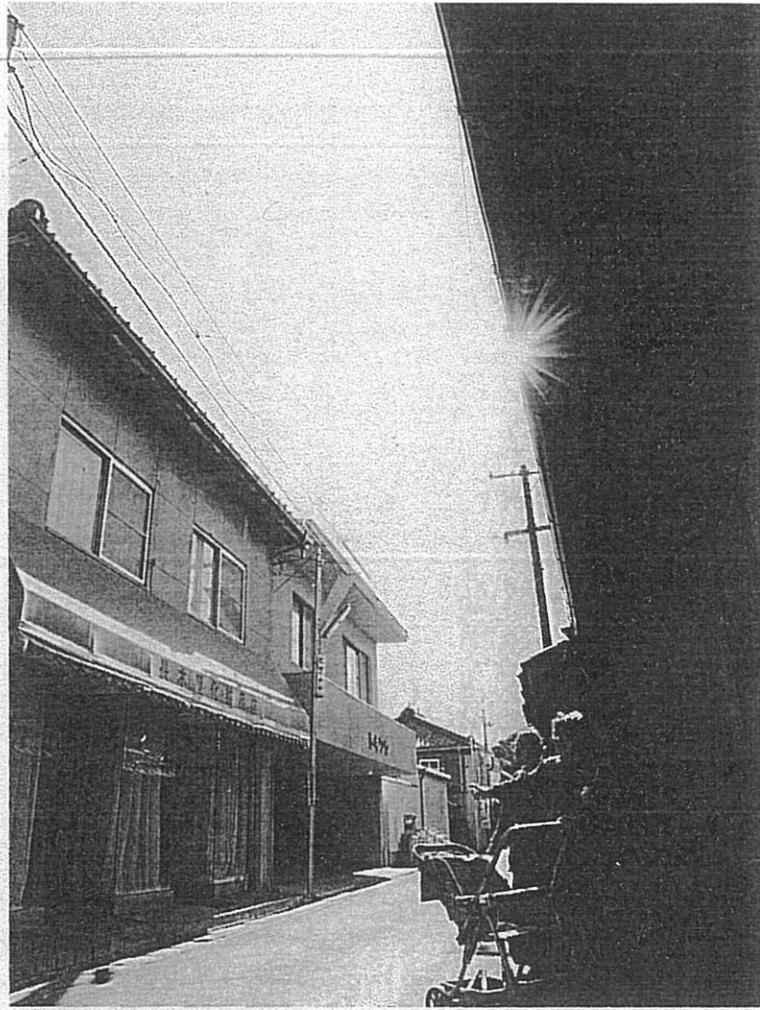
んど知られていない。

もちろん、わたし自身も、河田をよく知らない。この稿を書くに当たって参考にした資料は、何冊かの本と、昭和四十五年、当時八十六歳の河田の母堂・マスノさんにお会いしたときのわたしの取材ノート、誠一の弟・徳一と小学校同窓の中井敬子さん（仁尾町・ずいひつ「遍路宿」同人）の記憶によるものである。

河田誠一（かわだ・せいいち、一九一〇―一三四年）―明治四十四年、仁尾町中須賀の父武吉、母マスノの二男として生まれた。仁尾小学校、県立三豊中学校（観音寺一高）を卒業して、昭和四年、早稲田大学高等学院文科に入学。翌年中退。昭和九年、肺結核のため高松市の仮住まいで没。二十三歳という若さであった。当然、誠一の文学作品は多くない。二十歳くらいまでは詩をつくり、その後は同人誌「東京派」「愛誦」「今日の文学」などに短編小説、文芸評論などを二十数編発表のほか、草野心平装丁の「河田誠一詩集」がある。

同人誌「桜」には、誠一をしのいで、井上友一郎が同誌に「河田の死は單に人間の死としか写らない。だが、河田は今度、彼だけが、完全に生きた筈だった。私はそれを炯々と凝視しなくてはならぬ」、そして坂出市出身の中河与一は「僕

河田誠一は、明治44年、父武吉、母マスの二男として生まれた。家業は雑貨店であった仁尾町中須賀



は河田君の作品で『海薔薇』という小説をよみ何かの不可解な高揚された詩情、南方の光線にみちたものを感じたのを覚えている」と、記している。

追悼号には、田村、井上、中河のほか、坂口安吾、眞杉静江、北原武夫らも、思い出の記を寄せている。

河田は立ち上がれなかった。死ぬまで高松の日赤病院で療養していた。死の数日前、市内塩上町の借家に移り、息を引きとる。最後を看取ったのは、誠一と恋仲だった清子さんである。

誠一の兄弟三人は、いずれも早世した。兄の春義は二十一歳、弟の徳一は二十九歳で没。三人の墓は、仁尾町の常徳寺の裏の墓地にある。清子さんは、上京して東北出身の人と結婚したが、三十六歳で死んでいる。

誠一の死から、四十年近く経った昭和四十八年、私が主宰する「四国作家」八号で、「作品ノート・河田誠一」を特集した。井上友一郎、桂孝二（香大名誉教授）氏や中井

敬子さんに思い出を書いてもらった。

その後の朗報は、東京で古本屋を営んでいる青木正美氏の河田研究と出版である。青木氏は取材のため来県、観音寺や仁尾を数日歩かれた。

「掘出し奇譚」（青木正美・古本通信社）の中で、七十七歳にわたって誠一を紹介してくれた。

誠一と青木氏の出会いは、古本市で買った段ボール箱からはじまる。その中に、名もない河田誠一の肉筆詩集があった。

「この無名詩人の生涯はどういうものだったのかと思いがつのった」。母、マスノさんあての手紙もあつた。「いまからうんと勉強してえらくならねばなりません。よい小説をかかねばならないのです（中略）金を送って下さい。僕は今日から一銭なしになりました。切手代がないので切手をはらずに出します。御免下さい」とある。

胸をわずらい、ぎりぎりまで東京で暮らし、都落ち直前の手紙のようだ。

この稿を書きながら、遠い日、マスノさんを訪ね、取材ノートにメモしながら、マスノさんに案内されて誠一兄弟の墓へ参ったことを思い出していた。

「誠一も弟の徳一も孝行もんです。口返事一つするでなし、ええ子でした」

墓を見上げ、涙ぐみながら、「ほんまに、ええ子じゃった」
一冊の詩集をかかえたマスノさんは、何度もそう繰り返した。

メモ 河田誠一（かわだ・せいいち）

（河田誠一の詩）

花のなき家

南のとほき旅よりかへりて、
わがこゝろにつきし污垢を洗はず、
垢とれば
空腹のごとき君への思想に
われ、死なむと思へば。

花のなき日はいかにさびしきことぞ。
死病よりも、苦しきことぞ。

かつて東都にあそびし一年、
かへりければ赤き一輪の椿の咲きてありし
ならはしぞ、
いまはなくて
今日もまた、
星の数たらぬことはあらむ。